

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 3 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22530692

研究課題名（和文） 子育て支援における社会的絆が親子の絆の変容と回復に与える影響

研究課題名（英文） Effects of social bonds in parents' group meeting on their parent-child relationships and its modification

研究代表者

庄司 一子 (SHOJI ICHIKO)

筑波大学・人間系・教授

研究者番号：40206264

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、育児に困難を抱える親を対象にグループミーティングを実施し、参加者の「社会的絆」が親と親子関係をどのように変容させるかを明らかにすることである。参加者は107名で1年間のミーティングの前後に質問紙が実施された。調査の結果、育児への否定的感情、高虐待不安群の不安に有意な低下が示された。ミーティングで表明された感情・気づきは居場所の機能と重なっていた。本研究から社会的絆の形成における居場所感の重要性、子どもとの関係、親の変容への社会的絆の肯定的影響が示唆された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to examine the effect of parents' group meetings for the parents who have difficulties with child-rearing, and to clarify how "social bonds" improve parent-child relationships and influence parents themselves. 107 parents participated in monthly meetings for one year, and they were asked to complete the questionnaire before the beginning of the program and after the one-year program. The result showed a significant decrease in negative feelings towards child-rearing after the one-year program. Among those who initially showed a higher degree of anxiety related to child abuse, the result also showed a significant decrease in anxiety related to child abuse. This study suggests that it is important to obtain the feelings of "Ibasho" in the group meetings for those parents to develop "social bonds", and "social bonds" could have a positive effect on parent-child relationships and on parents themselves.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：対人関係，社会的絆，子育て支援

1. 研究開始当初の背景

子育てを通して形成される親子の絆は、その後の子どもの成長と発達において人間関係の基本となるものである。しかし従来の研究報告（e.g. 子どもの虐待防止センター，2004；日本小児保健協会，2001；柏木，2001ほか）同様、これまでの筆者らの調査（庄司，2006）でも乳幼児を育児中の親の約40%が、子育てがづらい、虐待するかもしれないという育児困難感や虐待への不安を訴えている。

筆者らはこれらの親を対象とし、保健師とともに茨城県下においてグループミーティングによる地域の子育て支援を3年間実施し、その親の子育てに対する考え方や子どもへの関わり方の変容における臨床的効果を実証してきた（庄司・杉本，2008）。

一方、このグループへの参加が参加者に及ぼす影響や形成された仲間との関係がどのようなものか、またこれが参加者自身や子育てに及ぼす変化や親子関係の変容の様相については、まだ明らかにされていない。

そこで本研究は、グループによる子育て支援によって形成される「社会的絆」が「親子の絆」にどのような影響を及ぼし変容させるのかを詳細に検討しようとするものである。

社会的絆（Hirschi，1969）は、一般に attachment, commitment, involvement, belief があり、この社会的絆が非行の内的抑止要因として考えられ、検討されてきた。近年、この「社会的絆の理論」が再考され、発達段階によって社会的絆の機能が変容することが議論されている（那須・菅野，2007）。また、高木ほか（2007）による大学生を対象とした親子関係における「絆」概念の検討によれば、親子関係の絆概念には絆の「心理的効

用」「専攻要因」「否定的・不安定性」「自然発生性」が示され、絆の新たな側面が検討され、明らかにされている。

一方、従来から行われてきた集団心理療法の一つとも考えられているセルフヘルプグループは、参加者が相互に自分を自由に安心して表現し、それによって相互に支え合い、日常生活への適応を支えようという目的をもった活動である。筆者は過去5年に渡って、地域の保健所や保健センターでの子育て支援に関わってきた。ここで行われる子育て支援は、主に虐待の可能性や子育てに大きな不安を抱える乳幼児を育児中の親を対象としたグループミーティング（MCG: Mother and Child Group）である。このグループミーティングには専門家（保健師、臨床心理士）も参加するがあくまで一参加者として親と共に同等の立場で参加する。この活動によって母親の変容、子育ての変化、子どもに対する発言・態度の変化、参加者相互の関わりの変化など、大きな臨床的な効果と変化が得られてきた。しかし、この活動の効果と成果について事例報告や活動の実践報告はあっても（岩堂・松島，2008）この集団参加の効果、社会的絆を実証的に検討した研究はほとんど見られない。

そこで本研究は、育児に困難を抱える親を対象としたグループミーティングによる子育て支援を通して、グループにおいて形成される成員間のつながり（社会的絆）とはどのようなものか、またこの社会的絆が親子の絆、親自身にどのような影響や変容をもたらし、親子関係をどのように・変容・回復させるのかを明らかにすることを目的とする。なお、

本研究では、育児困難を抱えた親が子育て支援グループに参加することによって生じる「集団参加者間の情緒的結びつき」「参加者の集団への所属意識」を「親子の絆 (Bowlby, 1969)」と対比させて「社会的絆」ととらえ、この視点から社会的絆を検討する。

2. 研究の目的

少子高齢化社会の中、子育ての問題、家族の問題は我が国における大きなテーマである。特に現在の学校教育の中で教師を悩ませているのは子どもの問題だけでなく、さまざまな親への対応である。学校における子どもの問題を親の問題や子育ての問題と切り離して考えることはできない。

本研究は、県内市町村で地域における乳幼児の育児支援に取り組む関係者（保健師、臨床心理士）との協同の下、育児に困難を抱える親を対象とし、専門家と母親が参加するグループミーティングによる子育て支援を通してグループにおいて形成される社会的絆が、親子の絆、親自身にどのような影響を及ぼし、親子関係をどのように変容・回復させるのかを明らかにすることを目的とする。

これまでの筆者の調査では乳幼児を育児中の親 400 名のうち 40%が育児困難感や虐待への不安を訴えている(庄司, 2006)。従来の社会的絆理論(Hirschi, 1969)は、社会的逸脱行為の抑止要因として考えられてきた。本研究は、育児困難を抱えた親が子育て支援グループに参加することによって生じる「集団参加者間の情緒的結びつき」「参加者の集団への所属意識」を「親子の絆 (Bowlby, 1969)」と対比させて「社会的絆」ととらえ、この社会的絆の積極的側面に注目し、社会的絆が親子関係に及ぼす影響・効果を検討することを目的とする。これを明らかにすることによって、集団によって形成された社会的絆の影響、個を育てる力を明らかにし、社会的絆を育て

るグループ支援のあり方、その意義について考察することである。

本研究は 3 年前から試験的に準備と実践を始め、現在、地域の関係機関、専門家との連携の下、本格的に支援を進める段階を迎えている。そのため、子育て支援の必要な親のスクリーニング、MCG の実践と効果の検証を重ね、効果をもたらす要因を明らかにすることによって地域と密着した子育て支援を効果的で持続的で、より質の高い支援に資することが求められている。

本来なら、親子関係の絆は社会的絆の形成の基礎となり、子どもは社会化され、おとなとして道徳的、規範的な行動が身につくはずであるが、現代社会は、個人も子育て中の親子も社会的関係から阻害され、隔離されて孤立した状態である。親子だけの閉鎖された関係の中で子育てが行われていることが多い。それが育児不安や虐待、子育て上のさまざまな問題につながっている場合も多い。MCG による子育て支援は、与えられた社会的集団の中で形成される社会的絆が、親子の絆、親子関係の回復と変容、新たな親子関係の形成に寄与するとすれば、現在進められているグループミーティングは社会的にも大きな意義を持つ。また、少子化社会の中で育つ子どもたちの成長と発達においても、ポジティブな影響と意義をもつと考える。

3. 研究の方法

対象者：参加者総数は 3 年間で 107 名で、月 1 回 1 年間ミーティングに参加し、事前事後の調査結果が得られた 38 名（平均年齢 33.6 歳、子どもの数平均 1.31 人、平成 24 年度 13 名）のデータが分析にかけられた。

調査内容：＜子育てに関する調査＞子育てに関するデモグラフィック要因に関する質問、子ども観 (庄司・杉本, 2004)、育児感情 (牧

野, 1985; 岩田, 2000; 庄司・杉本, 2004)、虐待不安(庄司, 2006)、抑うつ尺度(福田・小林, 1969)が用いられた。調査は一年間のグループミーティング期間の事前(4月)事後(3月)に実施された。

グループミーティング(MCG)の実践: 地域保健所、保健センターでMCGが実施された。MCGの目的は、「子育てや虐待の不安を訴える親への支援、虐待予防」である。対象者は虐待している/疑われる親、育児不安が強い親、抑うつや発達障害等何らかの困難を抱える親で、支援の効果が期待される親であった。定期検診や電話相談などで保健師が会を紹介し、会への参加の同意が得られた対象者についてカンファレンスを開き参加メンバー(参加者)を決定した。〈支援方法〉支援はグループミーティング(以下会)の形式で行われる。会は参加者が子育ての悩み、子どもや家族、自分自身を事由に語り合うことで進められる。①会のメンバーは、担当保健師2名(司会、記録)、カウンセラー、子育て中の親3~4名で計6名~8名程度である。保育士も子ども担当のメンバーであり会の前後のカンファレンスに参加する。②1回の会は月1回90分、1年間継続した。③会の前後はスタッフでカンファレンスを開く。その後会が実施された。参加者は全員同じ立場で発言する。④またMCGでは親が子育てから解放されて自分を振り返る時間をもてるよう親は子ども連れで参加でき、会の間は保育士がプレイルームで子どもを預かる。プレイルームにはベビーベッドも用意され、保育士は子どもの発達、プレイの様子や変化を観察し、会終了後のカンファレンスで報告する。

4. 研究成果

グループミーティングに参加した参加者総数(3年間)は107名であった。このうち、月1回90分1年間のすべてのミーティング

に参加し、事前事後の調査結果が得られた母親38名分(平均年齢33.6歳、子ども数平均1.31人、平成24年度は13名)のデータが分析にかけられた。

質問紙調査の主な結果は次の通りである。(1)デモグラフィック要因の分析から、メンタルヘルスについては、子どもの数が多いほど望ましくなく、また、サポートの有無で下位尺度に有意な差が示された。親にかかる子育ての負担は親のメンタルヘルスに影響し、特にサポートの有無は影響が大きいことを示しており、従来の研究を支持する結果である。(2)1事業所における参加者9名分の事前と事後の比較(2011, Figure 1)では、虐待不安の中の虐待危機感(図中横軸1)、制約感(図中2)に有意な低下が示され、育児感情の中の充実感欠如の有意な低下(図中4)、充実感の増加傾向が示された(図中3)。(3)参加者全員の事前事後の比較では、育児や子どもに対する否定的感情(否定的子ども観、育児拒否感、充実感欠如)に有意な肯定的変化が示された。下位尺度ごとに詳細に分析した結果、虐待不安の中の非統制感、育児拒否感、虐待危機感の3下位尺度と抑うつ尺度において事前の有意な群簡差が事後には無くなり、事後には望ましい方向に得点が低下したことが示された。

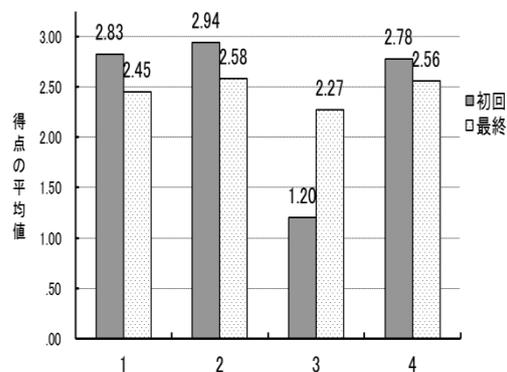


Figure 1: 初回と最終回で得点に有意な変化があったもの

(4)抑うつを従属変数とし、他の要因を説明変数として重回帰分析した結果、虐待不安の中の虐待危機感が最も抑うつに影響を及ぼしていた。

(5)一年間継続的に参加した親のミーティングでの発言内容の分析から、①安心・安全感、②感情の発散、③子どもや育児からの解放、④自己開示と自己の気づき・見つめなおし、⑤仲間の存在の気づき、⑥孤独からの解放、⑦自己肯定感が示され、これらは居場所の機能と重なっていた。これらの感情を経験する参加者は、子どもとの関わりを見つめ直し、肯定的発言や子どもとの関わりの増加、夫や家族への感情の肯定的変化が示され、自立的になり、他者や子育て仲間との関わりの増加が示された。

本研究から、グループミーティングにおける居場所感が社会的絆の形成において重要であり、社会的絆が感じられることは、親子関係や親自身にポジティブな影響を与えることが示唆された。今後は特に子育てに問題を抱えてはいない一般的親を対象の社会的絆に関する量的研究を進め、社会的絆と子育ての関係、社会的絆の形成を促進する子育て支援について検討を進める必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 4 件)

- ①庄司一子 (2013). MCG による子育て支援の実践と効果の検討—2 年間の実践を通して— 日本発達心理学会第 24 回大会, 571. 2013 年 3 月 24 日 (東京)
- ② Shoji, I., Nakai, D., Tomaru, K., Sugimoto, K., & Esumi, S. (2012). Analysis of abuse anxiety and child-rearing anxiety of mothers who

attend mother's group meeting. The 2012 Annual Conference of Korean Psychological Association, 214-215. 2012 年 8 月 24 日 (Chuncheon, Korea)

- ③庄司一子 (2011). 子育て支援 効果の検証—そのキーワードはなにか?— 日本教育心理学会第 22 回大会発表論文集, 42-43. 2011 年 3 月 27 日 (東京)
- ④ Shoji, I., Sugimoto, K., Nakai, D., & Tomaru, K. (2010). Effect of the support group for mothers who need help with their child-rearing. The 2010 Annual Conference of Korean Psychological Association. 780-781. 2010 年 8 月 20 日 (Seoul, Korea)

[図書] (計 1 件)

- ①庄司一子 (2012). 家庭での人間関係・社会性の発達の課題と支援 (2) ——虐待予防の観点から 長崎 勤・森 正樹・高橋千枝 (編) 社会性発達支援のユニバーサルデザイン 金子書房 p. 33-45. 300 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

庄司 一子 (SHOJI ICHIKO)
筑波大学・人間系・教授
研究者番号：40206264

(2) 研究分担者

杉本 希映 (SUGIMOTO KIE)
目白大学・人間学部・講師
研究者番号：90508045

中井 大介 (NAKAI DAISUKE)
郡山女子短期大学部・幼児教育学科・講師
研究者番号：20550643

都丸 けい子 (TOMARU KEIKO)
聖徳大学・心理・福祉学部・講師
研究者番号：40463822